

2024年度 出版助成図書



『自治体戦略としての総合計画 職員参加と住民参加を踏まえた策定・実施に向けて』

竹内 直人 他1名（松井 望） 編著

第一法規株式会社（2024年12月30日発行）

A5判／292頁

ISBN 9784474046634

¥3,520（税込）

<目次>

序章

第1章 自治体総合計画の実効性確保 ―1990年代以降の地方分権改革に伴う取り組み―

1 本章の目的

2 総合計画の歴史

3 実効性確保に向けた1990年代以降の取り組み

3.1 8つの取り組み

3.2 成果指標の設定

3.3 住民参加の促進

3.4 首長マニフェストとの連動

3.5 トータル・システム化の取り組み

3.6 条例化

3.7 総合戦略との連動

3.8 SDGsの明記

3.9 未来予測・未来カルテからのバックキャスティング手法

4 2020年代前半の自治体の課題

4.1 2020年代前半の課題

- 4.2 国による統制
- 4.3 人口減少下の総合計画

第2章 市町村の計画策定業務への都道府県による支援について

－「奈良モデル」の事例研究から考える今後の展望－

- 1 はじめに
- 2 小規模市町村における総務・企画部門の人員の状況
- 3 都道府県による市町村の支援・補完についての議論
 - 3.1 広域連携が困難な市町村における補完のあり方に関する研究会
 - 3.2 第32次地方制度調査会
 - 3.3 小括
- 4 「奈良モデル」の取組みについて
- 5 奈良県まちづくり連携協定の手法
 - 5.1 「県と市町村とのまちづくりに関する連携協定」の趣旨
 - 5.2 県と市町村とのまちづくりに関する連携協定～活用マニュアル～
 - 5.3 小括
- 6 市町村の計画策定に係る都道府県の支援の課題
- 7 市町村の計画策定業務についての都道府県の支援の今後の展望

第3章 自治体総合計画の発展と展望

- 1 総合計画の歴史と視点
 - 1.1 生き残る総合計画
 - 1.2 総合計画への視点
- 2 制度の視点：官治・集権的統治への批判
 - 2.1 国と自治体の蜜月時代：1950～1960年代
 - 2.2 総合計画の2つの脆弱性
 - 2.3 国と自治体の緊張関係：1970年代、武蔵野市総合計画の歴史的意義
 - 2.4 三層構造の逆機能
 - 2.5 松下圭一の総合計画理論
 - 2.6 松下理論の課題
- 3 政治の視点：自治体の政治過程に注目する
 - 3.1 1990年代：政策分野別基本計画の発見
 - 3.2 包括的地方自治ガバナンス改革とマニフェスト
 - 3.3 マニフェストの強みと課題
- 4 課題と展望
 - 4.1 国の巻き返し
 - 4.2 （総合）計画の類型化
 - 4.3 展望

第4章 総合戦略と総合計画の関係 ―第2期総合戦略の策定における変化―

- 1 本章の目的
- 2 既存研究の視点
- 3 本研究の方向性
- 4 福井県内の各市における総合戦略と総合計画の調整
 - 4.1 はじめに
 - 4.2 各市の策定状況と経緯
- 5 考察
 - 5.1 はじめに
 - 5.2 分析の方向
 - 5.3 総括的考察

第5章 総合計画の職員参加と人材育成

- 1 計画策定の職員参加と自前主義の希求
- 2 職員参加による計画策定の3つの効果
 - 2.1 政策の総合化
 - 2.2 内製化による信頼醸成
 - 2.3 人材育成・活用
- 3 計画策定を踏まえた人材活用：『ふくい2030年の姿』作成者たちのその後
 - 3.1 『ふくい2030年の姿』の策定目的と内容：長期計画等の策定停止と将来像の作成
 - 3.2 『ふくい2030年の姿』への職員参加による策定
 - 3.3 『ふくい2030年の姿』作成者たちのその後
- 4 自治体計画作成と職員参加のこれから

第6章 総合計画における住民参加

- 1 はじめに
- 2 都市における住民参加方法の変化
- 3 住民参加における市と町村の違い
 - 3.1 総合計画の立案状況
 - 3.2 計画策定前及び策定段階における住民参加方法の違い
 - 3.3 計画策定後の住民参加の違い
 - 3.4 住民参加の度合いの違い
 - 3.5 住民参加の効果の違い
 - 3.6 住民参加の問題の有無
- 4 おわりに

第7章 総合戦略における住民参加の機能

- 1 はじめに

- 2 計画と住民参加
 - 2.1 地方版総合戦略に関する先行研究
 - 2.2 地方版総合戦略における住民参加
 - 2.3 計画における住民参加
 - 2.4 本章の仮説
- 3 参加の様態
 - 3.1 住民意見の聴取方法
 - 3.2 意見聴取の方法の関連性
- 4 住民参加は計画を推進したか？
 - 4.1 交付金事業
 - 4.2 計画を推進するその他の要素
 - 4.3 推定結果
 - 4.4 分析結果のまとめ
 - 4.5 二時点パネルデータによる検討
 - 4.6 二時点パネルデータによる分析結果のまとめ
- 5 まとめ

第8章 福島県総合計画の策定と運用過程の特徴

—災害復興過程にある県づくりに総合計画が果たす役割—

- 1 はじめに（本章の目的）
- 2 総合計画の実効性の確保をめぐる論点
 - 2.1 計画の「実効性」の確保とは
 - 2.2 現行計画の実効性を確保するための取り組み
- 3 現行計画の策定をめぐる福島県の特徴
 - 3.1 広大で多極分散型の地域構造
 - 3.2 福島県の将来人口の見通し（地方創生・人口減少対策）
 - 3.3 総合計画と総合戦略との関係付け
 - 3.4 東日本大震災と原子力災害からの復興・再生
 - 3.5 総合計画と復興ビジョン・復興計画との関係付け
- 4 現行計画の概要
 - 4.1 現計画の構造
 - 4.2 現行計画の全体構成
 - 4.3 策定体制
 - 4.4 策定の経過
- 5 現行計画の策定の特徴
 - 5.1 住民参加の取り組み
 - 5.2 将来の姿の実現に向けた取り組み
 - 5.3 SDGs の視点から描いた将来の姿

- 5.4 計画の進捗・成果を測る体系（成果指標の増大）
- 5.5 職員参加の取組み
- 6 現行計画の運用の特徴
 - 6.1 PDCA サイクルの全体像
 - 6.2 出前講座の開催
 - 6.3 ふくしま SDGs 推進プラットフォーム
 - 6.4 SDGs における福島オリジナルの 18 番目の目標
- 7 おわりに

第9章 みんなで描こう「福井の未来地図」－県民参加プロジェクトとしての総合計画－

- 1 総合計画をデザイン
- 2 プロセスをデザイン
 - 2.1 県民参加プロジェクトとしてのビジョン
 - 2.2 将来構想ワークショップ
 - 2.3 福井の未来を一緒に考えるセミナー
 - 2.4 策定過程のオープン化「いつでもパブコメ」
 - 2.5 都市人材の「地方兼業」による広報戦略
 - 2.6 参加意識と満足度
- 3 コンセプトをデザイン
 - 3.1 基本理念と将来像
 - 3.2 実行プラン
 - 3.3 政策デザイン
- 4 アクションをデザイン
 - 4.1 FUKUI 未来トーク
 - 4.2 子どもたちと福井の未来を考える
 - 4.3 SDGs パートナシップ会議
 - 4.4 県民意識の変化
- 5 未来への扉をひらく

第10章 越前市総合計画－ウェルビーイングという戦略－

- 1 ウェルビーイングとふるさと
 - 1.1 現代における「ふるさと」の定義
 - 1.2 ウェルビーイングと幸福
 - 1.3 総合計画とウェルビーイング
 - 1.4 大きな課題と小さな課題
 - 1.5 他と比較できぬウェルビーイング
- 2 「ウェルビーイング」という戦略
 - 2.1 客観的指標の限界とくびき

2.2 「居場所」と「舞台」

2.3 指標と現実

2.4 ウェルビーイングの第三領域

2.5 DX への期待

3 市政への展望

3.1 私たちのウェルビーイング

3.2 これからの市政の目標

あとがき

索引

執筆者紹介



『コンテンツ文化のホスピタリティと経済学』

共感でつながり人を夢中にさせるサブカルチャーから読み解く』

牧 和生 著

株式会社晃洋書房（2025 年 3 月 10 日発行）

A5 判／170 頁

ISBN 9784771039391

¥2,200（税込）

<目次>

はじめに

1 章 経済学と合理性

——批判的検討——

- 1.1 経済学とはどのような学問であるか
- 1.2 合理性と経済学の前提
- 1.3 従来の経済学における意思決定の特徴とは
- 1.4 相互関係と経済学
- 1.5 経済学の本質は「人間学」であるべき

2 章 人間の心理と経済学

- 2.1 行動経済学はどのような学問であるか
- 2.2 行動経済学の代表的な理論
- 2.3 参照点とヒューリスティック
- 2.4 リアルかバーチャルかで変わる反応
——利己心と利他心で揺れる心——

2.5 行動経済学の可能性と期待

3章 オタク文化とサブカルチャー

——経済学の拡張——

- 3.1 文化と経済学のクロスオーバー
- 3.2 オタクとサブカルチャーの経済学
- 3.3 オタクやサブカルチャーの定義とその変化
- 3.5 オタクを巡る社会の変化
- 3.6 オタク文化の経済学

——経済理論の適応と限界——

4章 サブカルチャーを生み出す原動力

——コンテンツ消費の経済学——

- 4.1 消費者生成メディアとコンテンツ消費
- 4.2 コンテンツツーリズムと行動の心理
- 4.3 アーティストにおける意味の縮減
- 4.4 コンテンツ消費におけるデータベース消費
- 4.5 コンテンツツーリズムとデータベース消費

5章 女性オタクと熱狂的消費の心理的要素

5.1 行き過ぎた消費

——アイデンティティと同担拒否のメカニズム——

- 5.2 オタク研究の流れと経済モデルの設定
- 5.3 女性のオタクにおけるさまざまな消費行動の経済学的意義
- 5.4 無限回収と独占欲の心理
- 5.5 同担拒否の心理的メカニズム
- 5.6 過度な消費の心理と向き合うことの意義

6章 ホスピタリティの経済学的基礎

——共感の経済学——

- 6.1 ホスピタリティとは何か
- 6.2 ホスピタリティと共感のメカニズム
- 6.3 アダム・スミスの同感原理とホスピタリティとの相違
- 6.4 サービス経済の限界とホスピタリティの関係
- 6.5 ホスピタリティと経済学との共存
- 6.6 サブカルチャーやオタク文化におけるホスピタリティ
- 6.7 サブカルチャーとサービスとの異なる性格
- 6.8 小さな物語とホスピタリティ，サービスと大きな物語

7章 ホスピタリティと主体的行動の意義

- 7.1 コンテンツツーリズムと他者の価値観の許容
——社会的文脈を創り，文脈を読む関係性——
- 7.2 意味を紡ぐコンテンツ消費
——妄想と物語の創造——
- 7.3 タスクデザインと分析方法
 - 7.3.1 被験者と実験にあたっての注意事項
 - 7.3.2 タスクデザイン
 - 7.3.3 データの採取および分析方法とその意図
- 7.4 分析結果と解釈
 - 7.4.1 分析の結果
 - 7.4.2 分析結果の解釈
 - 7.4.3 実験結果における追加的検討
- 7.5 文脈を創り，読み解く心

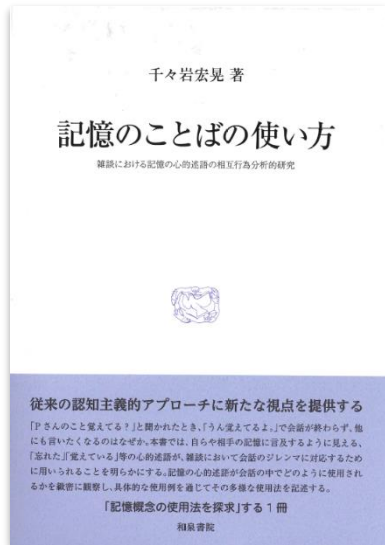
8章 コンテンツ消費と記憶

- 8.1 忘却と想起が連続するコンテンツと記憶の経済学
- 8.2 記憶と限定合理性
- 8.3 これまで実施してきた脳科学的実験への批判的検討
- 8.4 データの再検討および分析結果
- 8.5 分析結果の解釈とその含意についての検討
- 8.6 幅広く展開されるコンテンツ研究と経済学との融合への期待

おわりに

初出一覧

索引



『記憶のことばの使い方 ―雑談における記憶の心的述語の相互行為分析的研究―』

千々岩 宏晃 著

有限会社和泉書院（2025 年 3 月 20 日発行）

A5 判／344 頁

ISBN 9784757611160

¥10,450（税込）

<目次>

凡例 1：本書で用いられるトランスクリプト（転写）記号

凡例 2：ウィトゲンシュタインの仕事と省略記号との対応

第 1 章 序論 記憶の言葉と行為

1. 言葉の意味と行為
2. 述語と言葉の使い方
3. 懐疑への回答
4. 伝統的な「記憶概念」で理解することの不精確性
5. 「思い出す」ということ、「覚えている」ということ
6. 精確ではない記述がもたらすもの
7. 本書の構成

第 2 章 記憶現象の取り扱いの変遷

1. 会話研究における「記憶」概念の取り扱い
2. 認知主義的記憶観への抵抗
 - 2.1 認知主義的記憶観の流行

- 2.2 日常言語学派による言語的転回とデカルト的二元論への抵抗
- 2.3 記憶の痕跡に対する批判
- 2.4 機能的意味論および相互行為相貌論
- 2.5 概念の論理文法分析とエスノメソドロジーにおける「記憶」概念
- 3. 日本語会話を対象とした記憶概念に関わる研究
 - 3.1 レリヴァンス（有意性：relevance）
 - 3.2 言説心理学とエスノメソドロジーの「認知」に関する論争
 - 3.3 記憶概念に関する会話の研究と、会話分析の穏健路線
- 4. 先行研究のインパクトと本研究での「記憶」概念の取り扱い
- 5. 第2章の小括

第3章 研究目的と分析対象・方法

- 1. 本研究の目的
- 2. 分析対象となるデータ
- 3. 分析方法
- 4. 第3章の小括

第4章 会話の進行を調整する記憶のことば

- 1. 進行性に関する先行研究
- 2. 話題開始を適切にする
- 3. 噂話の話題の導入を確認する
- 4. 追加説明の参照点を確認する
- 5. 十分な情報を与えたことを示す
- 6. 第4章の小括

第5章 同じことを示す記憶のことば

- 1. 記憶と参与フレームに関する先行研究
- 2. 言い換えによって同定する
- 3. 同調する
- 4. 語りの終了を示し同調する
- 5. 第5章の小括

第6章 抵抗する記憶のことば

- 1. 抵抗のための記憶に関する先行研究
- 2. 根拠提示で抵抗する
- 3. 根拠のプレースホルダーを立てて抵抗する
- 4. 第6章の小括

第7章 不可能を示す記憶のことば

1. 記憶と能力、その前提に関する先行研究
2. 状況的不能・部分的可能を示す
3. 規範的可能を指摘する
4. 弁解する
5. 撤回可能な場を作る、および話題を再開する
6. 第7章の小括

第8章 結論 分析と記述からわかる記憶のことばの使い方

1. 分析・記述の総括
2. 本研究の成果の位置づけ
3. まとめ—記憶のことばの使い方
4. 本研究の課題と今後の展開

参考文献

謝辞

索引